

一人歩き

九重 裕人
kokonoe hiroto

如何にして君が此処にたどり着き、如何様な心情を抱えているのか私は知りえない。しかし私の言葉に耳を傾けてくれるならば是非とも歓迎したいものだ。
まずは君に詩を送ろう。
さあ受け取ってくれ、一瞬の詩を

一瞬の詩

如何にして君が此処にたどり着き、如何様な心情を抱えているのか私は知りえない。しかし私の言葉に耳を傾けてくれるなら是非とも歓迎したいものだ。

まずは君に詩を送ろう。私にとってそれは一瞬の詩、君にとってもそれは一瞬となりえるだろうか？それとも永遠を想わせるだろうか？

さあ受け取ってくれ、一瞬の詩を。

誰しものが永遠を求めているのではないだろうか

神様が禁じた永遠

永遠への道は恐怖で塞がれている

禁じるのはそれを望むから

永遠 一瞬の永遠

人は永遠を望み永遠に恐怖している

直視できず目を背けこの幻想世界を生きている

短くて脆くて儂い一瞬の世界

有限と永遠

どっちの方が長いのだろうか？

永遠に行けば分かるのだろうか？

しかし永遠を迎えるその瞬間

僕らは認識の力を失ってしまう

それこそが永遠を一瞬たらしめるのかもしれない

認識できるのであれば

やはり永遠は永遠なのだろうか？

神様が唯一求めた継続

唯一禁じた断絶

そこに魅せられる僕は罪人なのだろうか？

さあ興じよう

一瞬の幻想世界を

僕らは物差しを探している

物差しの目盛りは多い方がいい

僕達が永遠にたどり着くのは

探し物を見つけた後

人の生は決して無駄ではない

たとえたどり着くその瞬間に物差しが砕け散るとしても

さあ興じよう

永遠の物差しを求めて

永遠の物差し、なかなか面白い表現だと思わないか？

君には長く退屈な詩だっただろうか？それなら謝らなくてはいけない。それと同時に残念な知らせがある。この話はまだ続くのだ。

さあ次は日記を手にとろう。この詩を書いた少年の書いた日記だ。私が口をきくのはもう少し後。さあ日記を読もう。

幼少の頃、次の日に出掛ける予定があると出発の時間が待ち遠しくて仕方ありませんでした。そんな時間を僕はよく時計を眺めて過ごしたものです。時間をかけてゆっくり回る秒針を眺めてはそのノロノロした態度を憂えていました。

そんな事にも飽きると決まって「早く眠くならないかな？」と考えます。寝ると時間が一瞬で進むからです。目を閉じ意識が遠のくと、次の瞬間には時計の短針はぐるりと回り反対側を指しています。僕は睡眠を一瞬で目的の時間へ導くタイムマシンに乗る事のように捉えていました。

しかし年齢を重ねると、この一瞬に違和感を持ち始めます。確かにそれは一瞬です。しかし軽度ながら疲労感をもたらすほど長い時間にも感じられる様になるのです。一度覚えた違和感は増長し、それは永遠を思われるほどに長い時間のように感じるようになりました。まるで朝目が覚める度に冬眠から目を覚ます動物にでもなった気分です。

勿論時計がありましたし家族もいましたから周囲の状況から考えて、睡眠時間は精々10時間程度だという事は知っています。しかしその頃の僕は自分の主観こそが最も信頼できるものとして、それ以外の情報を素直に受け入れる事ができませんでした。

一瞬であり永遠でもある時間、そんな時間に僕の心はどんどん惹かれていきます。

そんな僕の姿を見て両親は随分困り果てていたようです。実際僕が目に見えてしている事といったら布団に入り眠くなるのを待つだけです。「何か興味がある事はないのか？」と聞かれた事をよく覚えています。両親は知らずとも僕は永遠にとっても興味を示していたのですが、それを説明する事ができなかったあの頃の僕は、まるでこの世に興味がない子供に見えたそうです。

興味は更に深まり、いつしか僕が現実世界(起きている時間を)を生きるのは永遠(寝ている時間)を知る為になっていきました。そして更には生前、死後の世界の永遠にまで惹かれていき、それを知る為生きるようになるのです。

一度芽生えた好奇心は止まる事を知りません。それこそ永遠に辿りつく事に憧れ、死をもってそこへ辿りつこうと真剣に考えたくらいです。

それはまるで人の生を軽視し、まるで現実世界を永遠を因るための物差しへと変えていくかのようでした。

しかしそんな現実軽視によって現実世界で生きる重要性に辿りついたのです。永遠に囚われ永遠を愛した僕が現実に興味を示し、初めて現実を重視させたのは他ならぬ永遠を知るためでした。

それからの僕は普通の子供と同じ様に起きている時間を楽しみ感じるようになり、そんな姿を

みて両親も安堵したようです。

あれから時間が経って、永遠を知るために現実を生きるなんて事を僕はすっかり忘れていました。しかし今でも悩んだ時には自分に言いきかせています。この世界は1つの物差しに過ぎずそれだけで生きるに十分意味があるのだと。

天真爛漫な一人歩き

君の意思を無視して長々と語ってすまない。

君にも是非この作品を聞いて欲しかったんだ。私は彼のしていた様な天真爛漫な一人歩きがとても好きでね。

なんせ最近の人間は情報に敏感すぎる。真実と言う物は人間の想像の力を殺いでしまうのではないだろうか？もしあの空に浮かぶ雲は触れることすらできないものだと人類は誕生の瞬間から知っていたら、果たして天国や神なんてものを創造できたのだろうか？自由な子供を真実なんてもので縛りつけるからいつの時代も年老いた子供が閉塞感なんて物を味わうのだ。

やはり睡眠は永遠に繋がるべきであれば鏡の奥には不思議な世界が広がっているべきなのだと私は思う。

思いだしてほしい。照りつける日差しの下、アリの巣を穿り返していた時の探求を。強要される事がなければ賛同を求める事もないあの好奇心を。

私がいくら口を動かそうとも君の心を侵略することなどできないのだ。さあ君は君の赴くまま都合よく私の言葉を受け取りなさい。それも無意識ではなく意思持って捻じ曲げるのが望ましい。

。 　　いらぬ物から目を反らし、欲しい物を直視しよう。その先に何を見るかは君次第だ。君が見るのは今までと同じ風景だろうか？それとも違う世界だろうか？さあ私に聞かせてくれないか？